

市長の伊賀じまん

—伊賀の水辺の風景—



伊賀市内には誇るべき水辺の風景が多くあります。例えば、1991（平成3）年に発見された城之越遺跡（比土）です。日本庭園のルーツといわれるような遺跡が発見されたというニュースには、大変驚くとともに伊賀ってすごいと改めて感動を覚えました。現在は遺構を整備して水辺の祭祀が行われた古代の様子を復元し、さらに、花粉分析で植生を再現して千数百年前の風景や環境を蘇らせました。市内外の皆さんに歴史ロマンを体感しに訪れていただきたいと思います。

また逆柳の甌穴（高尾）も自慢のひとつです。城之越遺跡が人が作り出した遺産だとすれば、これは自然が作り出した驚きの遺産だといえます。甌穴とは、石や砂が絶え間ない水の流れによって回転することで、川底や川岸の岩盤を徐々に削ってできた深い穴です。2つある逆柳の甌穴の一方は直径3m、深さ1.2m、もう一方は直径1.5m、深さ4mと大変大きく、悠久の時と自然の偉大さを感じさせてくれます。この規模のものはほかではなかなか見られません。甌穴は普段、

▶城之越遺跡
▼逆柳の甌穴



川底にあり見られませんが、高尾地区で毎年7月に行われる甌穴まつりでは、水をくみ出し、はしごをかけ、中に降りて見られるようにしています。また、藤原千方の伝説と絡めて地域おこしにつなげていて、今年、東大和西三重観光連盟の表彰も受けました。こうした地域の皆さんの活動も素晴らしく、誇らしいことです。

さて、自慢の種につきない伊賀ですが、小京都といわれる城下町のまちなみでひとつ残念なことがあります。それは、京都のような水辺の風景をまちなかで楽しむことができないことです。以前は藤堂高虎が築いた上野城の外堀がありました。明治以降に埋められてしまいました。外堀が残っていたら、より一層小京都らしい風情のある水辺の風景が見られたことでしょう。また大雨のとき、調整池や防火用水としても大いに役割を果たしてくれたことでしょう。水辺の風景を取り戻し、災害に強いまちづくりを進めるためにも、今年認定された歴史まちづくり計画の一環として外堀を一部でも復元できれば素晴らしいと思います。（市長 岡本 栄）

伊賀市の文化財 99

市指定有形文化財（絵画） 春日鹿曼茶羅

「春日鹿曼茶羅」とは、春日神が鹿島から奈良へ鹿の背に乗って現れること（神仏が仮の姿となつて現れること）する様子を、神木を依代（神霊がよりにつく物）とする春日神の形式に則つて、鹿の背に着けられた鞍に依代である神籬を立てて描かれた図のことです。

これは、春日社第一殿の祭神である武甕槌命が、神護景雲元年（767）6月21日、中臣時風と秀行を従えて常陸国鹿島宮（茨城県鹿嶋市）を鹿に乗って出立し、伊賀国名張郡夏見郷、薦生中山、大和国安部山を経て大和国御蓋の山口に影向したとする春日社草創伝説に基づいています。この図は、絹本着色（絹布に彩色されたもの）で掛け軸になっており、本紙の寸法は、縦101.8cm、横37.8cm（総縦178.0cm、総横53.5cm）です。白い斑文の鹿の子模様の

鹿の背に、丹（赤色）地に截金（金箔を細く切ったもの）で斜格子文を施した多彩な縁飾りの障泥（泥よけの馬具）や杏葉（杏の葉型の装飾）を附した胸懸・尻懸（鞍から胸・尻に掛け渡す装飾緒）、前輪・後輪（鞍の前・後の輪状の高まり）に藤花を配した鞍、その上に立てられた神籬には神に藤の花と垂がさがり、神鏡を表す朱で縁取った金色の円相（鏡）が掛けられ、円相や鞍・飾金具には裏箔（絹地の裏側から金箔を貼ること）が施されています。

また、この図は上方に御蓋山や春日山の景観を描かない図様の「春日鹿曼茶羅」で、江戸時代前期（17世紀）の作と考えることができます。しかし、春日社第一殿から第四殿と若宮の祭神の本地仏（釈迦・薬師・地藏・十一面観音・文殊）も描かれず、代わりに下方に春日社二の鳥居前にある五位橋が描かれています。線描もたどたどしく後世の加筆と考えられます。さらに鹿の尻上に置かれていた飾金具の雲珠は、意図的に消されたのか、絵絹がよれて損傷しています。

この「春日鹿曼茶羅」は、伊賀と大和国との深い関係を示す例として、平成28年3月24日に、市指定有形文化財（絵画）に指定されました。

文化財課

TEL 47・1285
FAX 47・1290